

令和7年度 津山市立久米中学校 学校評価書

校長 齊藤 員由

I 自己評価

I 評価結果 ○は達成 ●は未達成(改善事項)

| 項目 | 成果と課題(達成状況) | 評定 |
|-------------------------|---|----|
| 学力の向上 | <p>○「学びのサイクル」を具体化し、教職員で共通理解して実践した。</p> <p>○効果的な場面で、ICT機器やタブレット端末の活用を軸に、興味や関心を持って授業に取り組むことができるよう、授業展開を工夫した。</p> <p>○意図的な協働学習を効果的な場面で取り入れ、議論や発表を充実させた。</p> <p>●家庭学習の時間は、年々減少しており、学習習慣の定着は厳しい。</p> | B |
| 表現力の育成 | <p>○授業や宿題の中で自分の考えを80字程度の2文で接続詞を用いて書くなど、次につながる端的で論理的な文章を書かせた。</p> <p>○「よむyomuワークシート」を活用した読解力や英語力の向上に取り組んだ。また、授業での振り返りで自分の考えをまとめさせた。</p> <p>●自問清掃を振り返る心磨きノートは、きちんとした取り組みができなかった。</p> | B |
| 規範意識の向上 | <p>○授業規律の徹底や積極的な生徒指導と、きめ細かな教育相談を実施した。</p> <p>○生徒の自主的な活動やピアサポート活動を推奨することで自己肯定感を高め、問題行動等の未然防止に努めた。また、久米中学校いじめ問題対策基本方針に沿ったいじめを許さない学校づくりを行った。情報交換を密に行い、外部機関と積極的に連携しながら適切な初期対応に努めた。</p> <p>●スマホや SNS の不適切な使用については改善に至らなかった。非行防止教室や情報モラル教室等で自身の利用について振り返らせたが、自分事として捉えきれず、すぐに不適切な使用をしてしまう生徒もいた。生徒の自己指導能力の育成が急務である。</p> | C |
| 豊かな心の育成 や課題改善に向けた実践力 | <p>○道徳の授業の中で、自分事として考えさせる場面を工夫した。</p> <p>○学級活動において学級における生活上の課題について話し合う活動を設定し、決定事項を実行した。</p> <p>○生徒会活動を活性化し、生徒による自治活動を推進させた。</p> <p>●頭で理解しても、善悪の判断や、正しい行いをするまでにはいたっていない。</p> | B |
| 地域とともにある 学校の推進 | <p>○HPや各種通信、学校公開(行事を含む)等、あらゆる機会を通して、学校を開いた。月に1回程度「ほっとカフェ」を開き、学校の様子を見に来ていただいた。</p> <p>○学校や地域で、子どもたちが外を知る体験活動の機会を設定し、つやま郷土学の推進を図った。地域の本物に触れる体験活動の「中学生こみゅ」や「先輩からのメッセージ」を実施した。</p> <p>○コミュニティ・スクールへの理解を深め、目指す生徒像を共有することで家庭や地域との連携を強めた。</p> <p>○学力向上の小中連携の具体的な取組を明確にし、中学校ブロック全教職員で取組を徹底した。</p> <p>●小中学校での指導・支援の差異を明らかにし、特に支援を要する生徒・保護者への対応や支援の仕方について共通理解が必要である。小中学校の教職員間の連携・情報交換を緊密に実施することと、指導・支援の一貫性を構築する必要がある。</p> | B |

(A:目標を上回っている B:ほぼ目標どおり C:目標を下回っている)

II 分析・改善方策

- ・生徒主体の授業実践、ICT機器を使った授業改善と学びのサイクルを徹底し、学び直しを行う。
- ・生徒の自治活動をさらに充実させ、自治的実践力の向上、集団づくりと学校づくりを行う。

2 学校関係者評価委員会（学校運営協議会委員が兼ねます）

| | | |
|--------------------|---------------|----------------|
| 松阪 宏士（学識経験者） | 甲元真佐代（主任児童委員） | 水島 俊光（健全育成団体） |
| 松本 浩之（町内会） | 新家恵津子（主任児童委員） | 村上 妙子（主任児童委員） |
| 國米 裕喜（地域学校協働活動推進員） | 行部 伸治（PTA 会長） | 末澤 雅彦（PTA 副会長） |

3 学校関係者評価

学校評価アンケートにおいて、各項目とも保護者や生徒からの評価が高くなっているが、果たして、問いをきちんと理解した上での回答か疑問である。

「規範意識の向上」の項目は、生徒の校内外の状況から考えると、非常に厳しい評価となる。問題行動等への対応や当該生徒・保護者への支援については、学校だけでは、改善は難しく、PTA や民生委員児童委員等と連携して行うことが望ましい。

特別支援を要する生徒への支援は、園・小学校と情報交換を密にして、できるだけ早く医療や福祉に繋ぐことが大切である。

4 来年度の重点取組（学校評価を踏まえた今後の方向性）

- 教員が生徒の協働的伴走者としての役割を担う授業づくり、生徒の「個別最適な学び」「協同的な学び」「主体的な学び」のための授業改善を行うために、現状の評価の基、計画的に校内研修を進めたい。
 - 9年間を見通した小中連携で、さらに「育ち」と「学び」をつなぐ必要がある。（算数・数学を中心とした教科指導と特別支援教育・不登校児童生徒等を中心とした生徒指導の連携等）
 - 家庭学習の充実については、内容の転換を図り、狭義の教科の家庭学習ではなく、広義の生涯学習の分野も含めたものに広げることを推進していきたい。
 - ICT活用（1人1台端末含）はより効果的な活用方法を取り入れ、充実させていきたい。県内外の Chromebook の有意義な活用の研究を進めたい。
 - 新入生の「学び直し」は、大変重要であり、わからないところをわかるようになるための支援をしていきたい。そのことが生徒の進路選択の幅を広げることにつながる。継続してモジュール学習や放課後学習に取り組む。全校テスト（国語・数学・英語）も全国・県調査を意識した問題に取り組ませたい。
 - 基本的な生活習慣については、今年度もメディアコントロールに引き続き課題があった。SNS等の適切な使用は、久米地区の保幼こ小に依頼し、保護者の方への啓発やスマホ・ゲームのルール作りを徹底して進めたい。
 - 生徒が、自己肯定感・有用感・効力感・存在感を高め、自分の適性に合った将来像がもてるよう、学校行事や体験活動等を工夫して行いたい。自分の進路を拓き、社会をたくましく生き抜く力を育むために、保・幼・こ・小学校・高校・地域等と連携した教育活動を工夫したい。身近な大人と良い出会いをさせたい。
 - 体験活動や道徳教育をより充実させ、生徒に自己指導能力を身に付けさせたい。規範意識の向上のために生徒自ら現状を認識し、改善できるよう働きかけたい。生徒主体の学校づくりを行うためにも今後継続して校則の見直しを行う。いじめについては、基本方針に沿って取り組み、関係機関等とも連携し、未然防止や適切な対応を行いたい。
 - 「コミュニティ・スクール」は、地域学校協働活動の実施だけではなく、今後も学校課題や教育課題について、学校がきちんと運営協議会委員に説明し、課題解決に向けた熟議を行い、学校課題に対応していきたい。
- 「コミュニティ・スクール」をさらに機能化させ、「中学生こみゅ」「ほっとカフェ」「先輩からのメッセージ」等の取組を継続させたい。今後も、保護者や地域の方々に気軽に学校に足を運んでいただき、学校の実情を知っていただくとともに、保護者や地域の方々と一体となった学校づくりを進めていきたい。現在の中学校の良くないイメージを払拭するためにも「問題行動」「要支援生徒・保護者」「不登校・長期欠席生徒」「部活動の地域展開」の対応について情報交換や対応について熟議を行い、改善に向けて具体的に取り組んでいきたい。